81 | 山川 | 世探 704

令和5年度用
（2023年度用）
山川出版社
内容解説資料
この資料は令和5年度用高等学校
教科書の内容解説資料として
一般社団法人教科書協会
「教科書発行者行動規範」に
則っております。

詳説 世界史

木村靖二／岸本美緒／小松久男／橋場 弦

世界史探究

世界史の枠組みを体系的に学べる信頼の教科書

ダイジェスト版

山川出版社

新学習指導要領にもとづく**4部構成**です。世界の歴史の大きな枠組みと展開を部ごとに構成しています。

分野・時代・地域をバランスよく構成しています。

さらなる探究活動を想定し、二次元コードから、本文に掲載した**図版の全体図**や**部分拡大**、**追加の図版**・**文字史料**などを参照できるようにしました。

配当時間例（月／時数）

4月／10
5月／10
6月／10
7月／9
9月／10
10月／10
11月／10
12月／9
1月／9
2月／10
3月／8

世界史へのまなざし① 地球環境からみる人類の歴史
自然環境と人類の進化 …… 4

世界史へのまなざし② 日常生活からみる世界の歴史
砂糖とコーヒーからみる世界の歴史 …… 8 ／ 余暇からみえる現代世界 …… 10 ／ 歴史のなかの家族 …… 12

第Ⅰ部 諸地域の歴史的特質の形成 …… 15

- 第Ⅰ部を学ぶ前に …… 16

第1章 文明の成立と古代文明の特質 …… 18
1 文明の誕生 …… 18
2 古代オリエント文明とその周辺 …… 20
3 南アジアの古代文明 …… 28
4 中国の古代文明 …… 30
5 南北アメリカ文明 …… 35

第2章 中央ユーラシアと東アジア世界 …… 37
1 中央ユーラシア――草原とオアシスの世界 …… 37
2 秦・漢帝国 …… 40
3 中国の動乱と変容 …… 44
4 東アジア文化圏の形成 …… 47

第3章 南アジア世界と東南アジア世界の展開 …… 54
1 仏教の成立と南アジアの統一国家 …… 54
2 インド古典文化とヒンドゥー教の定着 …… 58
3 東南アジア世界の形成と展開 …… 60

第4章 西アジアと地中海周辺の国家形成 …… 63
1 イラン諸国家の興亡とイラン文明 …… 63
2 ギリシア人の都市国家 …… 66
3 ローマと地中海支配 …… 75
4 キリスト教の成立と発展 …… 83

第5章 イスラーム教の成立とヨーロッパ世界の形成 …… 85
1 アラブの大征服とイスラーム政権の成立 …… 85
2 ヨーロッパ世界の形成 …… 91

第Ⅰ部まとめ …… 102

第Ⅱ部 諸地域の交流・再編 …… 103

- 第Ⅱ部を学ぶ前に …… 104

第6章 イスラーム教の伝播と西アジアの動向 …… 106
1 イスラーム教の諸地域への伝播 …… 106
2 西アジアの動向 …… 111

第7章 ヨーロッパ世界の変容と展開 …… 117
1 西ヨーロッパの封建社会とその展開 …… 117
2 東ヨーロッパ世界の展開 …… 122
3 西ヨーロッパ世界の変容 …… 126
4 西ヨーロッパの中世文化 …… 134

第8章 東アジア世界の展開とモンゴル帝国 …… 137
1 アジア諸地域の自立化と宋 …… 137
2 モンゴルの大帝国 …… 144

第9章 大交易・大交流の時代 …… 150
1 アジア交易世界の興隆 …… 150
2 ヨーロッパの海洋進出とアメリカ大陸の変容 …… 158

第10章 アジアの諸帝国の繁栄 …… 162
1 オスマン帝国とサファヴィー朝 …… 162
2 ムガル帝国の興隆 …… 166
3 清代の中国と隣接諸地域 …… 169

第11章 近世ヨーロッパ世界の動向 …… 176
1 ルネサンス …… 176
2 宗教改革 …… 180
3 主権国家体制の成立 …… 184
4 オランダ・イギリス・フランスの台頭 …… 189
5 北欧・東欧の動向 …… 195
6 科学革命と啓蒙思想 …… 199

第Ⅱ部まとめ …… 202

第Ⅲ部 諸地域の結合・変容 …… 203

- 第Ⅲ部を学ぶ前に …… 204

第12章 産業革命と環大西洋革命 …… 206
1 産業革命 …… 206
2 アメリカ合衆国の独立と発展 …… 209
3 フランス革命とナポレオンの支配 …… 212
4 中南米諸国の独立 …… 217

第13章 イギリスの優位と欧米国民国家の形成 …… 220
1 ウィーン体制とヨーロッパの政治・社会の変動 …… 220
2 列強体制の動揺とヨーロッパの再編成 …… 226
3 アメリカ合衆国の発展 …… 234
4 19世紀欧米文化の展開と市民文化の繁栄 …… 238

第14章 アジア諸地域の動揺 …… 242
1 西アジア地域の変容 …… 242
2 南アジア・東南アジアの植民地化 …… 246
3 東アジアの激動 …… 252

第15章 帝国主義とアジアの民族運動 …… 258
1 第2次産業革命と帝国主義 …… 258
2 列強の世界分割と列強体制の二分化 …… 265
3 アジア諸国の変革と民族運動 …… 270

第16章 第一次世界大戦と世界の変容 …… 278
1 第一次世界大戦とロシア革命 …… 278
2 ヴェルサイユ体制下の欧米諸国 …… 284
3 アジア・アフリカ地域の民族運動 …… 292

第17章 第二次世界大戦と新しい国際秩序の形成 …… 300
1 世界恐慌とヴェルサイユ体制の破壊 …… 300
2 第二次世界大戦 …… 308
3 新しい国際秩序の形成 …… 314

第Ⅲ部まとめ …… 322

第Ⅳ部 地球世界の課題 …… 323

第18章 冷戦と第三世界の台頭 …… 324
1 冷戦の展開 …… 324
2 第三世界の台頭とキューバ危機 …… 328
3 冷戦体制の動揺 …… 332

第19章 冷戦の終結と今日の世界 …… 339
1 産業構造の変容 …… 339
2 冷戦の終結 …… 344
3 今日の世界 …… 349
4 現代文明の諸相 …… 358

地球世界の課題の探究 …… 364

世界史年表 …… 366
索引 …… 378

世界の自然・世界の気候区分 …… 表見返し
現代の世界 …… 裏見返し

合計時数105

【二次元コード】

本書の以下の頁に掲載した二次元コードから、インターネットを使用した学習ができます。二次元コードの使用にあたって使用料はかかりませんが、通信料がかかります。インターネットを使用する際には、先生の許可を得たうえで使用してください。また、使用にあたっては個人情報の扱いに十分注意してください。

p.21／p.22／p.41／p.54／p.61／p.62／p.74／p.87／p.99／p.116／p.123／p.134／p.140／p.147／p.151／p.155／p.165／p.168／p.179／p.207／p.213／p.215／p.239／p.245／p.252／p.259／p.299／p.312／p.314

【本書の使用上の注意】

暦 …… 西暦を使用し、必要により中国暦・ロシア暦などを用いて説明した。
在位・在任・生没 …… 原則として元首は在位・在任年を、ほかの人物については生没年を付記した。
外国語の仮名表記 …… 人名および地名は原語に近づけて表記するようにしたが、慣用の定着しているものはこれに従った。
史料引用 …… できるだけ必要な部分にとどめたが、前略・後略は特別には記さなかった。また、読みやすく書き改めたところもある。出典は文末に（ ）の形で示した。

「世界史探究」の導入として、1で地球環境　と人類の歴史との関わりを、2で身の回りの事象と世界の歴史との関わりを扱っています。

歴史のなかの家族

▶ 今日の社会で一般的とみられている「家族」像は、どのような特徴をもち、どのように生まれてきたのだろうか。

ホームドラマと家族観

1950年代末から日本で普及しはじめたテレビは、1960年代から70年代初めの高度経済成長期に、お茶の間での家族団らんの中心になった。そのなかで人気を得ていたのは家族の日常を描くドラマで、「ホームドラマ」という和製英語も、この時期に広く使われるようになった。現在年配の人ならば、豊かで民主的な家庭を描くアメリカ製のドラマや、大家族の悲喜こもごものエピソードを描く日本のドラマをなつかしく思い出すだろう。この時期は、日本の家族のあり方が大きくかわった時代であった。

第一に法律上、明治民法(1898年)以来の家制度が廃止され(1947年)、夫が戸主として妻や子どもに対してもつ強い管理権や、子どもの一人(多くは長男)が家を継ぐといった規定もなくなった。第二に、都市で雇用されて働く人々の増加とともに、両親とその子どもからなるいわゆる「核家族」が増え、また、出生率の低下にともない、「少なく生んで大事に育てる」子ども中心の家族観が広まった。若い夫婦は上の世代の干渉から解放されたが、それは、子育てや家事の手助けを失うことでもあり、多世代同居のにぎやかな大家族への郷愁もそこから生じてきたのである。

近代的な家族モデル

第二次世界大戦後の日本で普及したこのような家族の形は、→p.308歴史上、どのように生まれたのだろうか。19世紀に産業化が進んだ西欧では、労働者の場合は妻も子どもも外で働くことが多く、近隣や仲間集団の付き合いが大事であったのに対し、富裕な階層では、夫は外で働いて収入を得て、妻はメイドを使ってもっぱら家事・育児にいそしむという性別分業が進んだ。家族の絆を重視するとともに「男は仕事、女は家庭」という分業観をもつこの家庭像は、日本でも明治以降、軍人・官僚や会社の管理職などエリート階層に広まり、それとともに、家事と育児をかしこくおこなう女性の育成をめざす「良妻賢母」思想が提唱されるようになった。戦後になると、民主化の動きのなかで、家庭内での父親の権力は弱まったが、「男は仕事、女は家庭」の考え方は、核家族化とともに広範な階層に普及したのである。

現在、そのような家族のあり方は、世界的に大きくかわりつつある。共働きの家庭が増え、「男は仕事、女は家庭」という性別役割分担の意識は薄れてきた。さらに、個々人の様々な選択が可能になるなかで、婚姻届を出さないパートナー関係や、同性のカップルなど、多様な形態の結びつきは珍しいことではなくなっている。婚外子(法的に結婚していない男女のあいだに生まれた子)の権利の保護や、同性結婚の承認をめぐって、各国の法律も新しい状況に対応した変化をみせている。

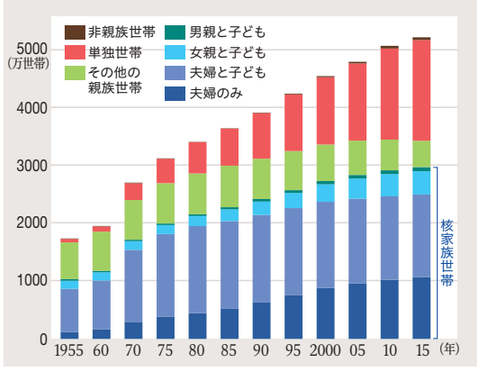
世界史のなかの家族

しかし、歴史を振り返ってみるならば、時期や地域によって、家族のモデルやその実態はもともと多様であったといえる。男女が結婚しても一緒に住むとは限らず、父子関係・母子関係のどちらが強いともいえない地域も多かった。古代の日本では、結婚は男性が女性の家に通う形で始まり、夫婦がみずからの家をもつようになっても、生業や財産、子どもの養育などについて、女性の発言力は強かったと考えられている。日本を含め、東アジアの伝統的な家族の特徴が男性支配の強い父系制とみなされているの

女王一家のクリスマスの団らん　19世紀のイギリスでは、夫婦が愛情をもって子どもをいつくしむ家族の姿が、中流階級にとっても理想となった。絵入り新聞などで報道されるヴィクトリア女王(→p.228)の生活様式は、そのモデルとなるものであった。

工場で働く女性たち　イギリス、マンチェスター近郊の工場で働く女性たちが、昼休みをしている様子。19世紀後半。

アメリカのホームドラマ　大型家電製品のある広い家や、子どもたちの意見を尊重する両親の姿は、アメリカの家庭の理想的イメージを戦後の日本人に伝えるものだった。写真は、ドラマ「パパは何でも知っている」(日本では1958～59年放映)より。



戦後日本の家族類型別世帯数の推移(人口統計資料集(2020)より作成)　戦前にも長男以外は核家族を形成する場合が多かったこと、また最近は単独世帯が増えていることからすると、世帯全体のなかでの核家族世帯の割合は、長期的にはそれほど増えているわけではないという見解もある。

判型をA５判→B５変型判に大きくし、図版を大きく・見やすく掲載しました。

馬に乗ってポロ競技をする女性（８世紀前半）　唐代の墓に副葬された陶製の人形のなかには、女性の乗馬姿を描くものも多い。

は、早期に父系社会が形成された中国の家族制度が模範とされ、その影響がしだいにおよんだことによるところが大きい。しかし、中国の歴史においても、女性が家庭の外で活発に活動した隋唐時代や、儒教道徳のもとで良家の女性は表に出ないものとされた宋代以降など、時代によって変化がみられた。→p.47 →p.138

家族のあり方は、社会全体の仕組みとも関わっている。近世の日本では、家の職業を受け継ぐことが当然とされていた身分制度のもと、「家」の目的は家業を存続・発展させることであり、そのためには、年老いた父が家長の地位を働き盛りの息子に譲ってその指図を受けることも多かった。固定的な身分制度は、人間平等の考え方とあい反する「封建的」なものとみなされがちであるが、必ずしも父親の権力の絶対性とは結びつかなかったといえよう。

一方、古代ギリシアの民主政の担い手となった市民は、妻子や奴隷に対して強い家長権を行使する男性であった。だれにも干渉されない家の君主のような立場であればこそ、たがいのあいだでは独立した人間同士の平等な関係を築くことができたのである。

Q▸ 小説やドラマ・アニメなどに描かれる家族像は、当時の家族のあり方をどのように反映し、または理想化したり批判したりしているのだろうか。人気を呼んだ様々な作品から、作者や読者・視聴者の家族観を読み取ってみよう。

アムステルダムのパレード　同性結婚の承認を最初に法制化したオランダ（2001年施行）をはじめとして、同性結婚を認める国はしだいに増えている。写真は、運動の象徴である虹色の旗を掲げ、性的少数者の平等を祝って毎年おこなわれるパレード。

第Ⅰ部

諸地域の歴史的特質の形成

部扉では、部全体の学習内容やその位置づけ・目標を、簡潔に示しました。

第Ⅰ部では、古代文明や諸地域の歴史的特質が形成されていく過程とその多様性を学ぶ。およそ１万年前頃から、地球上の各地では、それぞれ異なる自然環境のもとに様々な文明が誕生し、ときにほかの文明とも関係をもちながら展開した。こうした古代文明の成果を背景に、ユーラシア大陸やアフリカ大陸、アメリカ大陸の諸地域では、社会・宗教・文化などの多様な歴史的特質が形成されていくことになる。

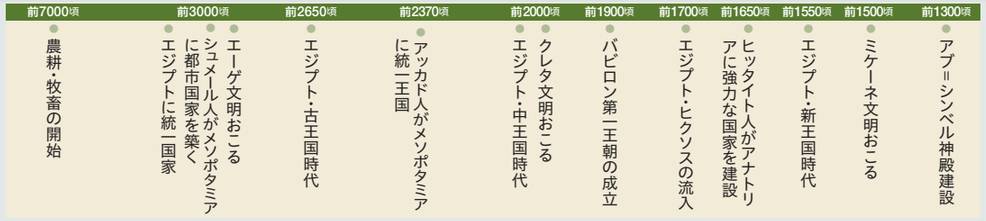
アケメネス朝・ペルセポリスの宮殿跡

第Ⅰ部を学ぶ前に　古代文明や諸地域の歴史的特質とは何だろうか？

生徒の関心を高め、課題意識を育むために、第Ⅰ部～第Ⅲ部の冒頭に設けています。

第Ⅰ部では、各地の古代文明や諸地域の歴史・特徴を個別に学んでいく。一方、それらを別の視点から読み解くと、地域ごとに異なる点や事例をまたいで共通する点も見出すことができる。その視点は、生業、身分・階級、王権、宗教、文化・思想など様々に考えられるだろう。ここではその一例として古代の西アジアに注目し、多様な身分・階級が生まれた背景やその役割、王権と宗教の関係などについて考えてみよう。

部を貫く視点や概念の一例として、第Ⅰ部では**身分・階級や王権と宗教**との関わりを、第Ⅱ部では**ヒトやモノの移動や経済**との関わりを、第Ⅲ部では**マスメディア**について取り上げました。



古代の西アジア・東地中海地域のおもなできごと

A 農作業をおこなう古代エジプトの農民たち（新王国時代の墓の壁画）　農民たちはどのような作業をおこなっているだろうか。また、右端に大きく描かれている人物は何をしているのだろうか。

A・Bの資料からは、当時の人々の生活について、どのようなことが読み取れるだろうか。

B シュメール人による農作業の手順（前18世紀～前17世紀）　古代メソポタミアの農民たちはどのような負担を負っていたのだろうか。

> お前が畑に灌漑をする準備をしなければならない時には、運河の土手や畑のでこぼこを取り除くために調べなければならない。お前が畑に水を入れた時、その水をあまり高くならないようにせよ。水が引いて畑が出て来た時には、畑の澱んだ地点を調べ、そこは囲いをせよ。牛に畑を踏まさせよ。雑草を処理した後で畑の輪郭を決め、そこを何度も３分の２マナの重さの薄い鍬で均せ。平たい鍬で牛の蹄跡を消し、〔畑を〕きれいにせよ。
>
> （歴史学研究会編『世界史史料１』）

> 強き王、アッカドの王ナラム＝シンは、四方世界が彼に反乱した時、イシュタル神が彼に示した愛によって、１年で９つの戦いに勝利した。そして彼ら立ち上がった王たちを捕らえた。彼が彼の町の基礎を危機から守ったことを見て、彼の町〔の人々〕は、エアンナのイシュタル神、ニップルのエンリル神、トゥトゥルのダガン神、ケシュのニンフルサグ神、エリドゥのエア神、ウルのシン神、クタのネルガル神に、彼をして彼らの町の神となるように願った。そして彼らは、アッカド市の中に彼のための神殿を建立した。（歴史学研究会編『世界史史料１』）

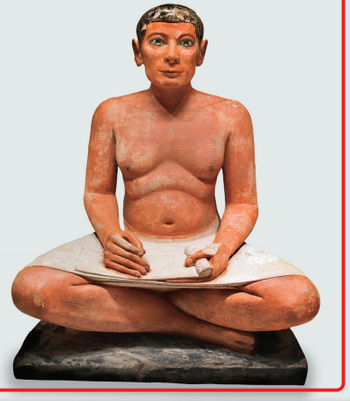
Dから、それぞれの町（都市国家）と神、また王と神は、どのような関係であったと考えられるだろうか。

D アッカド王国・ナラム＝シンの碑文（前18世紀～前17世紀）**と戦勝記念碑**　上は古代メソポタミアの都市国家を統一したアッカド王国の最盛期の王ナラム＝シンの碑文。右はナラム＝シンが近隣の民族を征服した際の記念碑（部分）。

E アブ＝シンベル神殿　紀元前13世紀頃にエジプトの王（ファラオ）ラメス（ラメセス）２世により造営された、太陽神ラーを祭神とする岩窟神殿。その入口には、青年期から壮年期までのラメス２世を模した、４体の巨像がおかれている。

Eのような巨大な建造物は、どのような人々によって建てられたのだろうか。また、なぜこのような事業が可能であったのだろうか。

> ドゥアケティという名のシレ（地名）の男が、ペピという名の息子に与えた教訓の始まり。その時、彼は、その息子を王都でもっともすぐれた学校に、貴族の子供たちと一緒に入学させるために、王都に向かって船で南へと行くところだった。そして彼はペピに言った。「私は鞭で打たれる者を見た。お前はその心を書物に向けるべきだ。労働者として人が連れ去られるのを見なさい。書物に勝るものはない。それは水上の船だ。ケミト（書記教育の教科書）の終りを読みなさい。そこにはこの言葉がある。曰く、「書記は王宮のどんな地位にあっても、そこで困窮することはない」。　（歴史学研究会編『世界史史料１』）



Cはどのような目的で書かれたのだろうか。また、書記と呼ばれた人々はエジプトでどのような役割を担い、ほかの職業と比較してその社会的な地位はどのようなものであったと推測できるだろうか。

C エジプト・中王国時代の「ドゥアケティの教訓」（前19世紀後半）**と書記座像**（古王国時代）

考察をまとめ、さらに生徒が自ら部の学習に対する問いや目標を立てることができるように工夫しています。

Q1　西アジア以外の地域では、どのような身分の人々が統治をおこなったのだろうか。また、統治者と宗教はどのような関係にあるだろうか。

Q2　資料に対する疑問や興味、または関心のある視点にもとづいて、自分自身で第Ⅰ部への問いを立ててみよう。

テーマに即した図版・文字資料の読み解きを積　み重ねることで、部の学習内容に対する考察を広げられるように　しました。

章冒頭に、章内容の概観と、それを理解するヒントとしての「問い」を設けています。

第1章

文明の成立と古代文明の特質

農耕・牧畜が始まると、大河流域を中心にエジプト文明・メソポタミア文明・インダス文明・中国文明などが栄えた。アメリカ大陸中・南部にも独自の古代文明が生まれた。

Q 各地の古代文明はどのような特徴をもっていたのだろうか。また、それらに共通する特質は何だろうか。

節・小見出し冒頭にも「問い」を設け、学習の内容や目的を明確化しています。

1 文明の誕生

Q 自然環境の変化をきっかけに、人々の生活や社会はどのように変化したのだろうか。

農耕と牧畜のはじまり

Q 農耕・牧畜は、自然環境のどのような変化から生まれたのだろうか。

約1万年前に氷期(→p.6)が終わると地球は温暖化し、自然環境が大きく変化したため、新人(→p.5)は地域ごとの多様な環境に適応していった。そのなかでもっとも重要だったできごとは、約9000年前の西アジアで、麦の栽培とヤギ・羊・牛などの飼育が始まったことであった。これが**農耕・牧畜**の開始である。これにより人類は積極的に自然環境を改変する能力を身につけ、食料を生産する生活を営みはじめた。人類史は、狩猟・採集を中心にした**獲得経済**から、農耕・牧畜による**生産経済**に移るという重大な変革をとげたのである。その結果、人口は飛躍的に増え、文明誕生の基礎が築かれた。

農耕・牧畜が始まると、人類は集落に住み、織物や土器をつくり、また石斧・石臼などの**磨製石器**を用いた。**新石器時代**の始まりである。こ

彩文土器　赤・黒・茶などの彩色文様をつけた土器。良質の粘土を用いて器体が薄く、メソポタミアを中心に東西に伝播した。

磨製石器　新石器時代を特徴づける、砂や砥石で磨いた石器。写真は磨製石斧で、マルタ島出土のもの。

農耕をおこなう男女　牡牛に犂を牽かせて土地を耕す男性と、その後に続いて種をまく女性。前1200年頃のエジプトの壁画より。

注を頁の両脇に置いて本文との対応をわかりやすくし、内容も充実させました。

のような初期農耕民の新石器文化は、アジア・ヨーロッパ・アフリカの各大陸に広がった❶。

文明の誕生

Q 文明が生まれるためには、どのような条件が必要だったのだろうか。

初期の農耕は雨水だけに頼り、また肥料を用いない方法がとられていたため、収穫が少なく、耕地も替えていかなくてはならなかった。しかし、メソポタミア(Mesopotamia)❷をはじめとする地域で**灌漑農業**が始まると、食料生産が発達してより多くの人口をやしなうことが可能になり、多数の人間を統一的に支配する国家という仕組みが生まれた。こうしてナイル川(→p.23)、ティグリス川・ユーフラテス川(→p.20)、インダス川(→p.28)、黄河・長江(→p.31)などの流域に**文明**が誕生し❸、やや遅れてアメリカ大陸(→p.35)にも独自に文明が形成された。

ユーフラテス川沿岸の灌漑水路を表した粘土板(前17世紀)

こうした文明においては、宗教や交易の中心である**都市**が生まれ、支配する人とされる人とのあいだに階級の差が生じた。また、武器や工具などの**金属器**がつくられ、多くの文明では政治や商業の記録を残すための**文字**も発明された。文字の使用によって、人類は過去の記録を参考に将来に備え、複雑で抽象的な思考をすることもできるようになった。ここから人類史は、歴史時代に入っていった。さらにそれぞれの文明は、その地域の自然環境によって様々な特色をみせた❹。

❶アメリカ大陸には「新石器時代」という時代区分は用いられないが、農耕は古くからおこなわれていた。

❷ギリシア語で「川と川のあいだ」という意味で、ティグリス川とユーフラテス川に挟まれた地域(ほぼ現在のイラクにあたる)をいう。

❸アフリカでは、ナイル川のほかにも西アフリカのニジェール川、中央アフリカのコンゴ(ザイール)川、南部アフリカのザンベジ川の流域で、それぞれ古くから農耕がおこなわれていた。

❹16世紀頃にはじまる「世界の一体化」(→p.161)の以前にも、世界各地では言語や宗教を共通の基盤として、独自の特徴をもつ文化的なまとまりが形成されていた。本書では、こうしたまとまりを「東アジア世界」「地中海世界」などの表現を用いて示している。

判型を大きくしたことで、従来よりも図版や史料を豊富に掲載しました（図版約600点、表・文字史料約100点）。

2 古代オリエント文明とその周辺

Q 古代オリエント文明は、世界の歴史にどのような影響を与えたのだろうか。

バビロニアの地図　下部に刻まれた円は海を表し、その内側が当時考えられた世界全体で、外側は想像上の世界。中央の縦長の線はティグリス川・ユーフラテス川（またはユーフラテス川のみ）を、小さな円は都市を表している。

オリエントの風土と人々

Q オリエントの風土は、その文明の特質とどのような関係にあるのだろうか。

オリエント（Orient）とはヨーロッパからみた「日のののぼるところ、東方」を意味し、西アジアからエジプトにかけての地域を指す。秋から冬にかけての雨季以外には降雨がほとんどなく、乾燥して気温が高いために、砂漠・草原・岩山が多い。羊やラクダを飼育する遊牧生活に加えて、沿海や河川流域の平野、あるいはオアシスで、小麦・大麦・豆類・オリーヴ・ナツメヤシなどを栽培する農業が営まれてきた。とくにティグリス川・ユーフラテス川、ナイル川など大河の流域では、定期的な増水を利用して早くから灌漑農業がおこなわれ、高度な文明が発達した。

ティグリス川・ユーフラテス川流域の**メソポタミア**→p.19には、周辺からセム語系（Semites）やインド＝ヨーロッパ語系（Indo-European）の遊牧民が豊かな富を求めて移住し、興亡を繰り返した。一方、ナイル川のめぐみをうける豊かな**エジプト**（Egypt）は、砂漠と海に囲まれているため、エジプト語系の人々が長期にわたって高度で安定した文明を営んだ。また両地方を結ぶ**シリア**（Syria）・**パレスチナ**（Palestine）地方は、メソポタミアとあわせて「肥沃な三日月地帯」を形成し、小麦やオリーヴの栽培がおこなわれるとともに、セム語系の人々が地中海や内陸部での交易で活躍した。オリエント社会では、大河を利用した治水・灌漑をおこなうために、早くから宗教の権威によって統治する強力な**神権政治**が出現し、独自の信仰生活と文化を生み出した。

古代のオリエント

図や地図、グラフは、カラーユニバーサルデザインに則った配色や線種で作成しています。

ジッグラト（聖塔）　シュメール人の都市国家ウルの遺跡にある、復元された煉瓦造りの塔。王や神官は、正面と側面から階段をのぼったところにある祭壇で都市の神をまつった。

「ウルのスタンダード」の「戦争の場面」「平和の場面」の画像を掲載しています。

ウルのスタンダード

ウルのスタンダード　ウルの遺跡から発見された横長の箱の工芸品。発見した考古学者の説にしたがってスタンダード（旗章、軍旗）と呼ばれるが、実際の用途は不明である。前後左右の面には、戦争や貢納の場面を表したとみられるモザイクがほどこされている。

シュメール人の都市国家

Q 都市国家に富や権力が集まったのはなぜだろうか。

灌漑農業の発達したメソポタミア南部では、前3500年頃から人口が急激に増え、神殿を中心に数多くの大村落が成立した。やがて文字が発明され、銅器・青銅器などの金属器が普及しはじめた。

前3000年頃には大村落が都市へと発展し、前2700年頃までにウル・ウルクなど**シュメール人**（Sumerians）（民族系統不明）の**都市国家**が数多く形成された。これらの都市国家では、王を中心に、神官・役人・戦士などが都市の神をまつり、政治や経済・軍事の実権を握って人々を支配する階級社会が成立した。その結果、優勢な都市国家の支配層には莫大な富が集まり、壮大な神殿・宮殿・王墓がつくられて、豪華なシュメール文化が栄えた。しかし前24世紀には、都市国家はセム語系の**アッカド人**（Akkadians）によって征服された。

ハンムラビ法典(抜粋)

1. 人が他人を殺人の罪で告訴し、その罪を立証できなかったなら、告訴人は殺されなければならない。

195. 息子がその父親を殴ったならば、彼は自分の腕を切り落とさなければならない。

196. 他人の目をつぶしたならば、自分の目をつぶさなければならない。

199. 他人の奴隷の目をつぶしたり、他人の奴隷の骨を折ったならば、奴隷の値段の半額を支払わなければならない。

(中田一郎訳『ハンムラビ「法典」』、一部改変)

スサ(イラン)で発見されたハンムラビ法典碑と楔形文字　碑上部の浮き彫りで、玉座に座る太陽神を崇拝しているのがハンムラビ王。下の楔形文字はハンムラビ法典碑の一部で、イギリスのローリンソン(1810～95)らによって解読の手がかりが示された。碑全体の高さ2.25m。

ハンムラビ法典

Q▸ 復讐法の原則がみられる条文はどれだろうか。また被害者の身分によって刑罰に差があるのはなぜだろうか。

本文の理解を深めたり、とくに重要な史料を掲載しています。また、読み解きのポイントや比較の視点などを盛り込んだ「問い」も付しています。二次元コードでは別の条文などを掲載しました。

メソポタミアの統一と周辺地域

Q▸ メソポタミア文明が今日に残した文化的遺産には、何があるだろうか。

アッカド人はメソポタミア南部の都市国家をはじめて統一したが、その統一国家は前22世紀に崩壊した。その後、前19世紀初めにセム語系のアムル人(Amurrites)が**バビロン第１王朝**をおこし、**ハンムラビ王**(Hammurabi 前18世紀頃)のときに全メソポタミアを支配した。王は首都バビロンで神の代理として政治をとりおこない、運河の大工事によって治水・灌漑を進め、また**ハンムラビ法典**を発布して、法にもとづく強力な統治をしいた。その刑法は「目には目を、歯には歯を」の**復讐法**の原則に立っていたが、刑罰は被害者の身分によって違っていた。

ハンムラビ王の時代に栄えた文明の影響は、周辺の諸民族にもおよんだ。そのうち、早くから鉄器を使用していたインド＝ヨーロッパ語系の**ヒッタイト人**(Hittites)は、前17世紀半ば頃、アナトリア高原に強力な国家を建設し、メソポタミアに遠征してバビロン第１王朝を滅ぼし、シリアにも進出してエジプトと戦った。また、**カッシート人**(Kassites)はザグロス山脈方面から南メソポタミアに侵入して、バビロン第１王朝滅亡後のバビロニア❶を支配した。さらに北メソポタミアにおこった**ミタンニ王国**(前16世紀)も西方のシリアへと領土を広げ、ヒッタイトに服属するまで強大な国力を保った。こうしてオリエントでは前15～前14世紀以降、諸王国が並立する複雑な状況が生まれた。

メソポタミアは多神教の世界であったが、民族が交替するごとに信仰される最高神もかわった。シュメール人

❶バビロンを中心とするメソポタミア南部の地域。

ヒッタイトの戦車　ヒッタイトで用いられた戦車は２人乗り・２輪で、軽量かつ速かった。

本文の理解を深める図版を充実させました。

が創始した**楔形文字**は、言語の違いをこえて多くの民族に広まり、粘土板に刻まれて用いられた。また、**六十進法**や太陰暦が使用されるとともに、太陰暦に閏月を設けて実際の季節とのずれを補正した太陰太陽暦❷も生み出され、天文・暦法・数学・農学などの実用の学問も発達した。

エジプトの統一国家

Q▸ エジプト王国が長期にわたって安定した支配を続けられたのは、なぜだろうか。

「エジプトはナイルのたまもの」❸という言葉通り、エジプトではナイル川の増減水を利用して豊かな農業がおこなわれた。また、ナイル川の治水には、住民の共同労働と、彼らを統率する強力な指導者が必要であったため、全国を統一的に支配する仕組みが早くから発達した。

前3000年頃、エジプトではメソポタミアより早く、王(**ファラオ**)(Pharaoh)による統一国家がつくられた。以後、一時的に周辺民族の侵入や支配を受けながらも、国内の統一を保つ時代が長く続いた。この間に約30の王朝が交替したが、そのなかでも**古王国**(前27世紀頃～前22世紀頃)・**中王国**(前21世紀頃～前18世紀頃)・**新王国**(前16～前11世紀)の３時代に繁栄した。

エジプトの王は生ける神であり、神官や役人を使って専制的な神権政治をおこなった。ナイル川下流域のメンフィスを中心に栄えた古王国では、クフ王(Khufu 前26世紀頃)らがおそらく自分の墓として、巨大な**ピラミッド**(pyramid)を築かせた。これは神である王の絶大な権力を示している。中王国時代には、中心は上エジプトのテーベに移ったが、その末期にシリア方面から遊牧民の**ヒクソス**(Hyksos)が流入し、国内は一時混乱した。しかし、前16世紀にヒクソスを撃退して新王国が成立し、さらにシリアへと進出した。前14世紀には**アメンホテプ４世**(Amenhotep Ⅳ 在位前1351頃～前1334頃)(イクナートン(Ikhnaton))が中部エジプトのテル＝エル＝アマルナに都を定め、従来の神々の崇拝を禁じて一つの神(アトン(Aton))だけを信仰

ヒッタイトの鉄剣　古くは隕鉄などの自然鉄を用い、さらに鉄鉱石を製錬して鉄器を製造した。

❷月の運行にもとづく太陰暦では、１年が354日となって実際の季節とのずれが生じてしまう。そこで閏月を設けてこれを補正したのが太陰太陽暦である。おおむね19年に７回の割合で閏月を設ける。

❸ギリシアの歴史家ヘロドトス(→p.73)が書き記した言葉。ナイル川は毎年７～10月に増水・氾濫して、上流から沃土を運んだので、エジプトではほかの地域に比べて豊かな農業が営まれた。

ギザのピラミッド　カイロの南西13km、ナイル川西岸に並ぶ。左が最大のクフ王のピラミッド。

マチュ＝ピチュ　ペルーのアンデス山脈中、標高約2400mのマチュ＝ピチュに残るインカ帝国の遺跡。大きく精巧な石造の神殿や貯蔵庫などが建てられており、その技術の優秀さと専制権力の強大さがしのばれる。

巨石人頭像　オルメカ文明の宗教遺跡で発見されたもの。高さ2.85m。この文明は宗教色が強かったとされ、肉食獣であるジャガーへの信仰なども知られる。

❶アステカ王国の首都テノチティトランは、16世紀には世界最大級の人口をもつ都市だったと考えられている。

キープ　縄の結び方によって数字を示し、家畜と人口の調査をおこなった。

中南米の先住民文明

Q 中南米にはどのような先住民文明が栄え、また、どのような支配体制が築かれたのだろうか。

メキシコ南部と中央アメリカの先住民文明の原型となったのが、前1200年頃までに成立したオルメカ文明である。その衰退後に、ユカタン半島で**マヤ文明**（Maya、前10世紀頃～後16世紀）が成立し、メキシコ南部ではテオティワカン文明（Teotihuacán、前1世紀～後6世紀）が、その後にアステカ王国を中心とする**アステカ文明**（Azteca、14～16世紀）が成立した。マヤ文明は4世紀から9世紀に繁栄期を迎え、ピラミッド状の建築物、二十進法による数の表記法、精密な暦法、マヤ文字などを生み出した。アステカ文明も、ピラミッド状の神殿を造営し、絵文字を用いたほか、道路網でメキシコ各地と結ばれた巨大都市❶や複雑な身分制度をもつ国家を築いた。

他方、アンデスの高地では、前1000年頃に北部にチャビン文化（Chavín）が成立して以降、様々な王国が現れたが、15世紀半ばに現在のコロンビア南部からチリにおよぶ広大な**インカ帝国**（Inca）が、クスコを中心として成立した。インカの皇帝は太陽の化身として崇拝され、神権政治をおこない、アステカと同様にほかの先住民部族を服属させるかたちの支配体制を築いた。インカ文明は石造建築の技術にすぐれ、発達した道路網をもち、各地から物資がクスコに運ばれて蓄積された。文字はなかったが、縄の結び方で情報を伝えるキープ（quipu）と呼ばれる方法で記録を残した。

これらの中南米の先住民文明は、大河ではなく雨水や泉を活用することで丘陵・山岳に都市を築いた。また鉄器や車輪、馬などの大型の家畜は利用されなかった。

第2章 中央ユーラシアと東アジア世界

匈奴の国家と秦・漢が現れた紀元前3世紀以降、ユーラシアの東側には、遊牧と農耕の2つの世界が並び立った。7世紀、可汗と皇帝を兼ねた唐の君主がこれらを統合した。

Q 2つの世界はそれぞれどのような特徴をもつ社会を形成し、またどのような関係にあったのだろうか。

1 中央ユーラシア――草原とオアシスの世界

Q 中央ユーラシアの人々の動向は、世界の歴史にどのような影響を与えたのだろうか。

中央ユーラシアの風土

Q 中央ユーラシアの風土に適応して、人々はどのような生活を営むようになったのだろうか。

ユーラシア大陸の中央部は、パミールの東西にのびる大山脈が高温多湿のアジアの季節風（モンスーン）をさえぎるために乾燥し、寒暖の差が大きい大陸性気候を特徴とする。ここには東のモンゴル高原から西の黒海北岸にかけて広大な草原が連なり、その南にはいくつもの砂漠が広がっている。そして、砂漠のあいだには高山地帯の雪解け水を水源とする中央アジア❶のオアシスが点在する。この広大な空間を**中央ユーラシア**❷と呼ぶ。ここでは、きびしい環境に適応した草原の遊牧民や、オアシスの定住民が活躍し、彼らは周辺の諸勢力と様々な関係を結びながら世界史の展開に大きな役割を果たした。

❶ユーラシア大陸中央部の地域名称。その範囲は一定ではないが、パミールの東西に広がる砂漠・オアシス地域を中心とする。現在では、カザフスタン、ウズベキスタン、トルクメニスタン、タジキスタン、キルギス、中国の新疆ウイグル自治区などの地域にあたる。

❷内陸アジアという名称も長く用いられてきた。

「内陸アジア」→「中央ユーラシア」に地域名称を変更するなど、本文では、全体にわたって近年の歴史学の研究成果を豊富に盛り込みました。

中央ユーラシアの地勢と遊牧諸勢力の移動

「**黄金人間**」　前4世紀～前3世紀の遊牧貴人の葬衣で、全身が金でおおわれている。筒袖の上衣にズボンという服装は騎馬に適しており、これはのちに中国・戦国時代の趙(→p.33)で胡服騎射というかたちで取り入れられた。

遊牧民の生活風景　モンゴルの草原地帯。遊牧民の住居は移動が簡単なゲル(組み立て式の家)であった。

遊牧民の社会と国家

Q▸ **騎馬遊牧民は、なぜ強大な国家を築くことができたのだろうか。**

中央ユーラシアの草原地帯では、羊・馬・牛・ラクダなどの家畜を主要な財産とする遊牧民が、草と水を求めて季節的に移動し、遊牧と狩猟による生活を営んでいた。彼らのおもな食料は乳製品や肉類であり、衣服は毛皮が中心で、住居も木製の骨組みをフェルトでおおう、移動に適した組み立て式であった。このように、家畜は衣・食・住すべての需要を満たす貴重な財産であった。彼らのあいだに青銅製の馬具や武器をもった**騎馬遊牧民**が登場するのは、前9世紀～前8世紀頃のことである。馬上から矢を射る遊牧民の集団は、機動性にすぐれた軍事力を備え、それは鉄製の武器を得るとさらに向上した。

騎馬遊牧民は血縁的なつながりをもつ氏族や、それを束ねた部族を単位として活動し、ときに統率力のある君主のもとで部族連合を組み、強大な**遊牧国家**を形成した。君主は忠実な親衛隊を従え、十進法に従って編制された軍団❶を率いて略奪や征服をおこなうなど、騎馬軍団の威力は周辺の諸勢力に大きくまさった。しかし、統率が失われると部族連合の再編がおこり、遊牧国家は興亡を繰り返した。また彼らは、ユーラシアの東西を結ぶ交易や文化交流にも貢献した。彼らが利用したルートは「**草原の道**」と呼ばれる。

❶匈奴の場合では、君主に従う諸王は一万の騎兵を率いるとされ、その下に千人長、百人長、十人長の指揮する部隊が編制された。こうした軍事組織はのちに社会組織ともなり、チンギス＝カンによる千戸制(→p.144)もその一例である。

スキタイと匈奴

Q▸ **遊牧国家の興亡は、ユーラシア大陸の東西にどのような変動をもたらしたのだろうか。**

文献上で知られる最初の遊牧国家は、前7世紀頃に黒海北岸の草原地帯を支配した**スキタイ**(Scythae)❷である。その軍事活動はアッシリア(→p.27)など古代オリエントにもおよび、黒海北岸のギリシア人植民市とも交流した。中央ユーラシア東部でも、前3世

❷スキタイ文化の特徴は、特有の動物文様をもつ馬具や武器である。よく似た遺物は、スキタイの活動地域のみならず、ユーラシア東部の草原地帯にも広く分布する。

歴史的事象のつながりや因果関係、さらにその位置づけなどが理解しやすいように、丁寧な記述を心掛けました。

発展的な学習を促すため、本文に関わる史料を掲載しました。

漢代の歴史家、司馬遷の描いた匈奴の姿(『史記』匈奴列伝より)

彼等は牧草をさがしもとめて畜類を牧するために転移する。その家畜で多いものは馬・牛・羊であり……水と草とをもとめて転々と移動し、城郭や常住地、耕田の作業はない。……文書はなく、言語を以て〔相互に〕約束をする。小児もよく羊に騎り、弓をひいて鳥・鼠を射ることができる……士はみな力強く弓を引くことができ、すべて甲冑をつけた騎士となる。その風俗は、平和の時は家畜にしたがって移動し、鳥や獣を射猟して生業とするので、一旦急変あるときは、人々は攻戦になれており、侵掠攻伐をする。……勝つと見れば進み、不利と見れば退き、遁走を恥としない。　(内田吟風・田村実造他訳注『騎馬民族史1　正史北狄伝』)

Q▸ こうした描写から読み取れる遊牧民社会の特徴は、どのようなものだろうか。

スキタイ美術　金製の鹿形装飾。

きが始まり、タリム盆地東部に月氏❸、モンゴル高原に**匈奴**などが現れた。匈奴は単于と呼ばれる君主のもとで強力な遊牧国家をつくり、とくに前3世紀末に即位した**冒頓単于**(在位前209～前174)❹は、西では中継貿易で利益をあげていた月氏を攻撃して中央アジアのオアシス地域を支配下におさめ、東では成立まもない漢(→p.41)を圧迫した。しかし、匈奴はやがて漢の攻勢を受けて前1世紀半ばに東西に、後1世紀半ばには南北に分裂した。南匈奴は後漢にくだり、北匈奴は遠く西方に移動した。

後3世紀には中央ユーラシアの東西で遊牧民の活動が活発となり、東部では**鮮卑**などいわゆる「**五胡**」(→p.44)が華北に進出し、4世紀以降、遊牧民と定住民がまじりあうなかでつぎつぎと政権を樹立した(五胡十六国(→p.44))。一方、西部では**フン人**(→p.92)の大規模な西進が始まり❺、ゲルマン人の大移動をうながした。こうして中央ユーラシアの騎馬遊牧民は、ユーラシアの東西に大変動をもたらすことになった。

❸月氏は中央アジア西南部に移動して大月氏となり、その領域からはクシャーナ朝(→p.55)が生まれた。

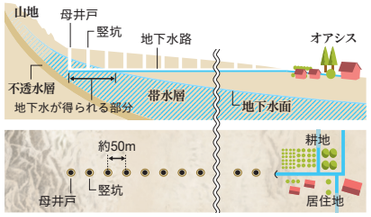
❹「冒頓」はトルコ＝モンゴル語で「勇者」を意味するバガトゥル(バートル)の漢字音写と考えられている。

❺西へ移動した北匈奴とフン人を同一とみなす説があるが、確証はない。ただし、匈奴の移動がほかの遊牧集団の西進を誘発した可能性は考えられる。

オアシス民の社会と経済

Q▸ **オアシス民は、遊牧民とどのような関係をもっていたのだろうか。**

乾燥した砂漠・草原地帯のなかでも、雪解け水による河川や地下水を利用できる中央アジアのオアシスでは、古くから定住民の生活が営まれていた。オアシスは、防御施設を備えて市場や寺院をもつ都市部と、灌漑による集約的な農業を営む周辺の農村部からなる独立した生活・経済圏であり、手工業生産や**隊商交易**の拠点としても重要であった。パミールの東部では**タリム盆地**周縁部、西部ではソグディアナやフェルガナなどに多数のオアシス都市が点在し、ラクダに荷を乗せた隊商がユーラシアの東西を往来する「**オアシスの道**」を形づくった。これは「草原の道」とあわせて、一般に「絹の道」(「シルク＝ロード」)とも呼ばれる。オアシ



カナート(カレーズ)の構造図　高温・乾燥のきびしいところでは、水の蒸発を防ぐため図のような人工の地下水路(カナート)を利用した。竪坑を延々と掘り抜き、長さが数10kmにおよぶ例もみられる。上は断面図、下は平面図。

オアシスの景観　現在の中国・新疆ウイグル自治区に位置するトゥルファン。

中央アジアを通る「オアシスの道」

古代中国の政治や社会の記述を刷新しました。

ス都市は連合して大きな国家をつくることはなく、周辺の大国の支配下に入ることが多かった。オアシス都市の資源や東西交易の利益は、北方の草原地帯の遊牧国家にとっても重要であり、たとえば、匈奴はオアシス都市の支配をめぐり漢と争奪戦を繰り広げた。

中央アジアのオアシス民は、しばしば遊牧国家による略奪や支配を受けたが、両者の関係はつねに敵対的であったわけではなかった。オアシス民の生み出す穀物や織物は、遊牧民のもたらす畜産物と日常的に交換されたほか、遊牧国家が保障した隊商路の安全は双方に経済的な利益をもたらした。このように遊牧民とオアシス民との関係は、緊張をはらみつつも互恵的であり、それは中央ユーラシアにとどまらず、東アジアの歴史の展開にも重要な役割を果たした。

2 秦・漢帝国

Q 秦・漢の時代に、地域間の結びつきはどのように変化したのだろうか。

「皇帝」の出現

Q 新たに現れた「皇帝」は、それまでの「王」とどのように異なるのだろうか。

前4世紀、「戦国の七雄」の一国であった西方の秦が、新しい政治制度や技術を取り入れて強大化した。東方の諸国は他国と同盟を結んで自国の防衛をはかったが❶、前221年、秦王の政に征服された。彼は国内を郡・県にわけて官僚を派遣する郡県制を征服地にも導入し、新たな君主の称号である「皇帝」を名乗って(始皇帝)、度量衡・文字の統一や思想の統制❷をおこなった。また、北方では戦国時代以来の長城を修築して匈奴と戦い、南方では華南に進出した。

しかし、あいつぐ軍事行動や土木工事の負担に人々は苦しみ、始皇帝が死去すると東方各地で反乱がおこって❸、秦は滅亡した。その後の混乱のなかで、楚の名門出身の項羽を破った農民出身の劉邦が、諸勢力から皇帝に推戴され(高祖)、漢王朝を開いた(前漢)。

漢代の政治

Q 漢の支配体制は、どのように変化していったのだろうか。

漢は秦の制度の多くを引き継いだ。高祖は秦の都咸陽の近くに新都長安(現在の西安)を建設し、統一以前の秦の領域を郡県制によって直接支配する一方、功臣や一族を王に任じて、かつての東方諸国の領域の支配をゆだねた❹。対外的には、冒頓単于のもとで強大化した匈奴に敗れ、こののち漢は匈奴に屈服して和平をはかった。

高祖の死後、皇帝と諸王の対立が深まり、やがて軍事衝突に発展した(呉楚七国の乱)。これに勝利した皇帝は、諸王国の統治に干渉するようになった。前2世紀後半に即位した武帝は、匈奴を撃退するとともに、諸王の実権を奪い、南越国❺や衛氏朝鮮❻を滅ぼして、漢の支配下に入れた。また、張騫を大月氏に派遣したことをきっかけに、中央アジアの交通路をおさえて、タリム盆地一帯にまで勢力をのばした。

武帝は、地方長官の推薦で官吏を選任する人事制度(郷挙里選)をとり、諸王国にも中央から官吏を派遣し、さらに監察官を送って全国を監視した。経済面でも、塩・鉄の専売や物価調整策❼などによって国内の統合

❶諸国が共同で秦に対抗する蘇秦の合従策や、個別に秦と同盟する張儀の連衡策がとられた(→p.34)。

❷実用書以外の書物を焼却し(焚書)、多くの学者を穴埋めにした(坑儒)とされる。

❸最初に陳勝・呉広による農民反乱がおこった。陳勝の「王侯将相いずくんぞ種(家柄)あらんや」という言葉は、戦国時代以来の実力主義の世情を表している。

始皇帝陵の兵馬俑　兵士と軍馬をかたどった俑(陶製の像)。約8000体すべての造形が異なる。始皇帝の強大な権力と、それを守る難しさを伝えている。

兵馬俑

秦・漢の青銅貨幣　秦の半両銭(左)と漢の武帝の時代に発行された五銖銭(右)。円形・方孔の銅銭は、始皇帝の征服活動によって東方に広まり、漢に受け継がれて東アジアの貨幣の基本形となった。

❹漢の初期の支配体制を、郡県制と封建制(→p.32)を併用したという意味で、「郡国制」と呼ぶこともある。

❺秦末の混乱期に独立した国家で、広東・広西・ベトナム北部を中心に、その周辺にまで勢力をおよぼした。

❻前2世紀に衛氏が朝鮮西北部に建てた国家。武帝はこれを征服して楽浪などの郡をおいた。

❼各地の特産品を国家がほかの地方へ輸送して物価を均一にする政策(均輸)と、貯蔵した産物の価格が上がると売り出し、下がると買い入れて、物価の水準を保つ政策(平準)があった。

多様な兵馬俑の姿や、始皇帝の銅車馬模型の画像を掲載しました。

近年の研究動向を踏まえて、モンゴルの人名・国名の表記を改めました。

2 モンゴルの大帝国

Q モンゴル帝国の成立には、どのような世界史的な意義があるのだろうか。

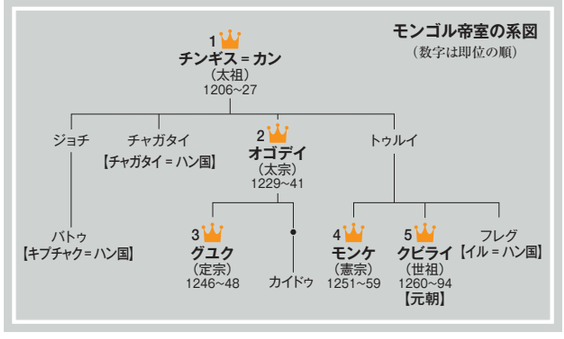
モンゴル帝国の形成

Q この時期に巨大な帝国が成立した背景には、何があったのだろうか。

12世紀初めに中央ユーラシア東部でキタイ(契丹、遼)が滅亡し、その一族が西方の中央アジアに逃れてカラキタイ(1132~1211 西遼)を建国すると、遊牧諸勢力のあいだに再編の動きが強まった。やがてモンゴル高原東北部で頭角を現したテムジンは、1206年のクリルタイ❶でチンギス=カン(Chinggis Khan 1162頃~1227 在位1206~27)として即位し、モンゴル系・トルコ系の諸部族を統一して大モンゴル国(Mongol)❷を建てた。彼は、軍事・行政組織として、配下の遊牧民を1000戸単位に編制した千戸制をしき、みずからの親衛隊を含めて強力な騎馬軍団を整えた。

チンギス=カンは、この軍団を率いて東方の金→p.139を圧倒したのち、ムスリム商人らの協力を得て西方遠征に出発し、中央アジア・イラン方面の新興国家ホラズム=シャー朝(Khwarazm Shah 1077~1231)を倒した。彼は遠征帰還後に西夏→p.138を滅ぼすと、まもなく死去したが、彼の子や孫たちは相互に権力を争いながらも征服戦争を継続した。カアン❸を称したオゴデイ(Ogodei 在位1229~41)が金を滅ぼして華北を領有する一方、バトゥ(Batu 1207~55)は西進してロシアや東ヨーロッパを制圧し❹、中央ユーラシア西部にキプチャク=ハン国(Kipchak 1243~1502)(ジョチ=ウルス❺)を建てた。その後、中央アジアにはチャガタイ=ハン国(Chaghatai 1306~46)(チャガタイ=ウルス)が成立し、西アジアではフレグ(Hulegu 1218~65)がアッバース朝を滅ぼしてイル=ハン国→p.113(Il 1258~1353)(フレグ=ウルス)を建てた。華北に拠点をおいたクビライ(Qubilai 在位1260~94)は、カアンを称したのちに南宋→p.139を滅ぼし、中国全土を支配した。

イル=ハン国時代に描かれたモンゴル騎士　戦士は騎射に適した筒袖の衣を着用し、短い合成弓を使っているが、繊細な頭飾りなど外見への配慮もうかがわれる。



モンゴル帝国の最大領域

こうして13世紀後半には、中央ユーラシアとその東西各地に、モンゴル人の政権が並び立った。各政権は高い自立性をもちながらもカアンのもとにゆるやかに連合したので、これら空前の規模のまとまりは、**モンゴル帝国**と呼ばれる。この帝国を構成していたのは民族・宗教ともに多様な人々であり、中央ユーラシアの西部では、モンゴル君主など支配層も含んだイスラーム化とトルコ化が進んだ。

元の東アジア支配

Q モンゴル帝国による支配は、東アジアにどのような影響をおよぼしたのだろうか。

モンゴル高原から華北・チベット・雲南・朝鮮半島におよぶ地域を勢力基盤としたクビライは、元(1271~1368 大元)という中国風の国名を定め(1271年)、モンゴル高原と華北の境界に新たな都を築いて大都と称した❻。大都はモンゴル帝国全土をおう駅伝制❼と連結され、運河により渤海湾とも結ばれた。元が南宋を滅ぼすと、海上交易で繁栄していた杭州・泉州・

❶モンゴル語で「集会」の意味。有力者が集まって、カンの選出や遠征など重要な事柄を合議のうえで決定した。

❷モンゴル語ではイェケ=モンゴル=ウルス。ウルスは「国」を意味する。

❸カンにまさる「皇帝」の意味で、この称号は元の君主に受け継がれた。なお、時代がくだると「カン」「カアン」は「ハン」「ハーン」と発音されるようになった。

❹モンゴル軍は、1241年のワールシュタットの戦いでドイツ・ポーランド連合軍を破り、同時にハンガリーにも侵攻したが、オゴデイ死去の報告を受けて中央ユーラシアの草原地帯に引き揚げた。

❺チンギス=カンの長子ジョチに与えられた所領をもとにしているため、このようにも呼ばれる。

❻大都は中国式の計画都市で、現在の北京市街の基礎となった。城内には運河と連結された大きな湖がつくられ、船が直接大都に乗り入れられるようになっていた。

❼モンゴル語ではジャムチ。幹線道路に沿って駅を設け、周辺の住民から馬・食料などを提供させた。モンゴルの王族や官庁から許可を得て牌子(→p.143)を受けたものは、各駅で宿泊・食事・馬の交換などの便宜を与えられた。

新安沈船　韓国南西部の新安沖からみつかった、元の時代の沈没船。いわゆるジャンク船で、日本の寺社名を記した木簡の荷札とともに、膨大な数の陶磁器や宋の銅銭が発見されている。

観星台(元代の天文台)　郭守敬は中国各地に設けられた観星台において、西アジアの天文学の技術を取り入れつつ、精密な天体観測をおこなった。そのデータにもとづいてつくられた授時暦は、日本にも受容された(江戸時代の貞享暦)。

銀錠　モンゴル帝国で流通した銀塊は、約2kgが基本単位であった。形状は様々だが、同じ重さのものが世界各地から出土している。2kgの銀錠を「元宝」と呼ぶ習慣は、こののちも中国に残った。

交鈔　この写真のものにはクビライ時代の年号が入っている。額面は様々で、これは銅銭2貫分の価値(もと銀錠の50分の1に相当)とされたものである。ただし、交鈔の実際の価値は大きく変動した。

広州などが元の支配下に入り、山東半島を経て大都に向かう**海運**と、杭州と大都を直接つなぐ新しい運河によって、豊かな江南もモンゴル帝国の商業圏に組み込まれた。こうして、大都を結節点に、陸路と海路の交易・情報ネットワークが結合された。また、クビライが樺太・日本やベトナム・チャンパー・ビルマ・ジャワなどに送った遠征軍は各地域の政治や経済・文化に大きな影響を与え、商業圏の拡大にも寄与した。

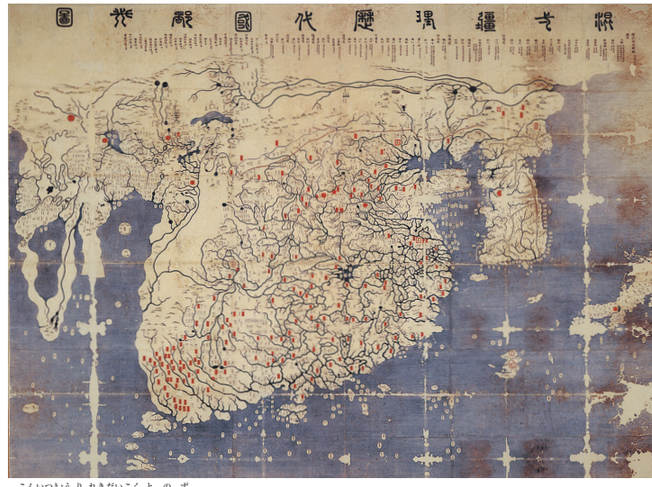
→p.108

モンゴル帝国における陸と海の交易を担ったのはおもに**ムスリム商人**で、ユーラシアで広くおこなわれていた銀経済(銀による決済)が中国にもおよんだ。元は塩の専売を実施したほか、取引税などによって莫大な銀を集め、紙幣(**交鈔**)を発行して銀の流通量の不足をおぎなった。利用価値が低下した銅銭は、**日元貿易**を介して、日本へ輸出された。

元の統治は中国的な官僚制度によってなされたが、中枢はモンゴル人が握った。**色目人**と総称される中央アジア・西アジア出身者は、経済面で力をふるった。金の支配下にあった契丹人・女真人を含む華北の人々は**漢人**、南宋のもとにいた人々は**南人**と呼ばれた。商業に力を入れた元は支配地域の社会や文化をさほど重視せず、儒学や科挙の役割は大きく後退したが、暦の改良や大都の水運整備に従事した郭守敬(1231～1316)のように、実用的な能力のある者には登用の道が開かれていた。支配層のモンゴル人には**チベット仏教**が重んじられ、都市の庶民のあいだでは『西廂記』『琵琶記』に代表される戯曲が流行した(**元曲**)。

歴史的事象の背景や因果関係をわかりやすく説明し、世界と日本のつながりにも配慮しています。

ヴェネツィアから出発するマルコ＝ポーロの一行(右手中ほどの小舟に乗ろうとしている一行)　『世界の記述』では日本についても述べられており、日本は黄金や真珠に満ちた豊かな島ジパングとして、ヨーロッパに知られることになった。



「混一疆理歴代国都之図」　15世紀初めに朝鮮でつくられた世界地図。交易活動がもたらしたモンゴル時代の地理的知見をふまえており、ヨーロッパ人による「発見」に先だって、アフリカ大陸(左端)南端の喜望峰(→p.158)を描いている点などが注目される。図はのちの時代の模写。

モンゴル帝国時代の東西交流

Q この時代の東西交流には、どのような新しさがあったのだろうか。

モンゴル帝国の成立によってユーラシア東西の統合が実現すると、ヒトやモノ、情報の移動・流通が活発化した❶。中央ユーラシアでは、仏教徒のウイグル商人やムスリム商人が富裕なモンゴル王族と手を組み、奢侈品などの盛んな取引をおこなって利益を分け合う仕組みも生まれた❷。

当時十字軍をおこしていたヨーロッパ人は、東方の巨大な帝国に関心をいだいて、ローマ教皇はプラノ＝カルピニ(Plano Carpini 1182頃～1252)を、フランス王ルイ9世は→p.118ルブルック(Rubruck 1220頃～93頃)❸を使節としてモンゴル高原に送った。クビライに仕えたとされるイタリア商人**マルコ＝ポーロ**(Marco Polo 1254～1324)の見聞をまとめた『世界の記述』(『東方見聞録』)は、ヨーロッパで大きな反響を呼んだ。また、13世紀末に教皇の命で大都に派遣された修道士モンテ＝コルヴィノ(Monte Corvino 1247～1328)は、そこでカトリックの布教にあたった。

モンゴル帝国によるユーラシア東西の統合は、学術や技術、思想面の交流も促進し、その成果は歴史記述から、地理学、地図作製、多言語からの翻訳、天文学、医薬、工芸、美術、攻城兵器に至るまで広い分野におよんだ。また、ラシード＝アッディーン→p.113は各地の情報を収集して、モ

「混一疆理歴代国都之図」

❶同時代のあるイタリア商人は、「黒海北岸のクリミアから中国までの道中は日夜を問わずに安全である」と書いている。

❷これらの商人たちは、モンゴル王族から交易の特権や国際通貨としての銀・生糸の出資を受けて取引をおこない、出資者と利益をわけあった。こうした共同関係から、彼らはオルトク(仲間)商人と呼ばれた。

❸ルブルックから情報を得たロジャー＝ベーコン(→p.135)は、モンゴルの「世界制覇」は天文学など科学の活用に起因すると考えた。

「混一疆理歴代国都之図」を拡大して見ることができます。

近世～近代にかけてのヨーロッパ史に関する記述も、歴史学の研究成果を盛り込んで刷新しました。

第11章 近世ヨーロッパ世界の動向

ヨーロッパは、経済的には海洋進出、精神的には宗教改革、政治的にはイタリア戦争を経て、中世とは明らかに異なる時代に移った。この時代をヨーロッパ史では近世と呼ぶ。

Q それまでの時代と比べ、近世のヨーロッパは何が異なっていたのだろうか。

1 ルネサンス

Q ルネサンスはどのような点で新しく、どのような点で古かったのだろうか。

ルネサンス運動

Q ルネサンスの動機はどのようなもので、また、その担い手はどのような人々だったのだろうか。

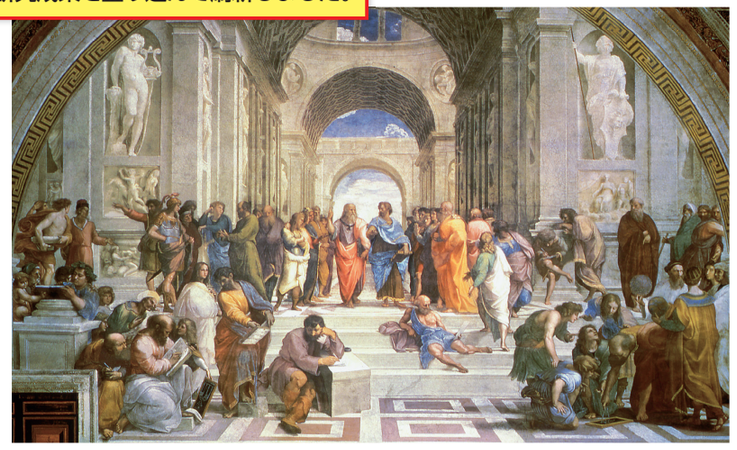
中世末期のヨーロッパでは、黒死病(ペスト)(→p.126)の大流行によって多くの死者が出たため、生ける者としての人間に以前よりも大きな価値が見出されるようになった。また、イスラーム圏から伝わった諸学問の影響(→p.135)を背景に、自然界に働きかける技術への関心が強まった。このため、自然とその一部である人間が肯定的なかたちで探究されるようになり❶、様々な発見がなされた。これらの動きをもとに、文芸・科学・芸術などの多様な方面で文化活動が展開されるようになり、これを**ルネサンス**(「再生」の意味)と総称する。ルネサンスを担った人々は、キリスト教は否定しなかったが、現世の文化を尊重し、そのもとでは**レオナルド＝ダ＝ヴィンチ**(Leonardo da Vinci 1452～1519)に象徴される文芸や自然諸学に通じた「**万能人**」が理想とされた。ルネサンスはフィレンツェ(→p.120)などのイタリア諸都市で14世紀に始まって、16世紀までに西ヨーロッパ各地へと広まった。

ルネサンスを推進したのは、中世後期以来発展した都市(→p.121)に住む教養人であった。ただし、その多くはメディチ家(→p.122)などの大富豪やフランス王・ローマ教皇などの権力者の保護下で活動したため、ルネサンスは既存の社会体制を直接的に批判する運動とはならなかった。

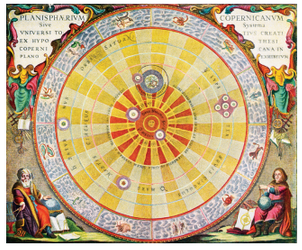
❶中世のキリスト教的人間観では、人は生まれながらに罪を負い、不浄で無力な存在とされた。他方で自然界は、神の被造物の最下位に位置する無価値なものとされ、恐怖の対象でもあった。

レオナルド＝ダ＝ヴィンチ

ルネサンス時代のイタリア



「アテネの学堂」 ラファエロ(1483～1520)作。ソクラテス・プラトン・ピタゴラス・アルキメデスなど(→p.73、74)、古代の学者の集いを理想化して16世紀初めに描かれたもの。



コペルニクスの天球図 コペルニクスは、天体観測にもとづいて、宇宙の中心は地球ではなく太陽であることを主張した。

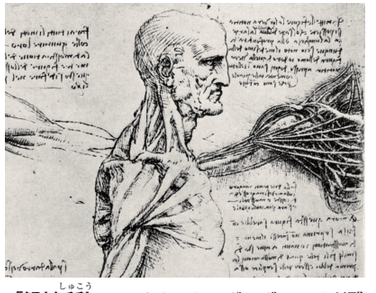
ルネサンスの精神

Q ルネサンスを支えた精神にはどのような特徴があり、また後世に何を残したのだろうか。

ルネサンスの目的の1つは、人が価値あるものとして現世を生きるための指針を得ることにあり、そのためにキリスト教以前のギリシア・ローマの文化が探究された。文芸や思想面におけるこの動きを、**人文主義**(**ヒューマニズム**)(humanism)という。中世の西ヨーロッパでギリシア語は忘れられ(→p.123)ていたが、オスマン帝国の圧迫でビザンツ帝国(→p.162)から逃れた知識人によって伝えられた。**ペトラルカ**(Petrarca 1304～74)や**ボッカチオ**(Boccaccio 1313～75)をはじめとする人文主義者たちは、ギリシア語を学びつつ、さらに信仰と学問の言語として存続していたラテン語(→p.134)の知識を用いて、ヨーロッパ各地の修道院に死蔵されていた文献を解読し、古代のいきいきとした人間の姿を復活させた❷。

ルネサンスの探究は物質面にも向けられ、自然の隠された性質を解明しようとする動機のもと、中世以来の占星術や錬金術にもとづいてルネサンス期の科学が展開された。占星術は天文学の発達を導いて、宇宙の全体的秩序の一部をなすものとして天体の動きが観測された結果、トスカネリ(Toscanelli 1397～1482)によって**地球球体説**が、さらに**コペルニクス**(Copernicus 1473～1543)によって**地動説**がとなえられ、人々の世界観に大きな影響を与えた。錬金術は金属技術の発達をもたらし、後世の化学の基礎ともなった。この時期には、はじめて人体の解剖図も登場し、古代ギリシア以来の医学の権威がゆらぐ(→p.73)とともに、人体が理想化されて描かれるようになった。

❷その成果の1つに、ホメロス(→p.72)の再発見がある。また人文主義者は、写本の文言の検討によって文章の真偽を確認する手法を確立し、これはのちのヨーロッパにおける古典学・聖書学・歴史学の礎となった。古典学の発達の結果、古代ギリシアの文明をヨーロッパ文明の源流とする観念も成立した。



「解剖手稿」 レオナルド＝ダ＝ヴィンチが残した人体の素描集。

誌面に掲載されていない、ファン＝アイク兄弟やドナテルロの作品、ブルネレスキによるサンタ＝マリア大聖堂ドームの画像などを見ることができます。

エラスムス　ネーデルラントの人文主義者エラスムスはヨーロッパ各地を旅し、イギリスのモアとも親交を結んだ。

ルネサンスの広がり

Q 多方面におけるルネサンスの成果は、後世にどのような影響を与えたのだろうか。

ルネサンスの精神のもと、その活動は様々な方面で展開された。建築では、古代建築の要素を取り入れて、均整と調和を重視する**ルネサンス様式**が成立し、建築はすべての学問を統合する最高の科学として称揚された。絵画では、油絵の技法が遠近法を用いて確立されて、近代絵画の基本である写実主義への道が開かれ、またキリスト教以外の主題も描かれるようになった。

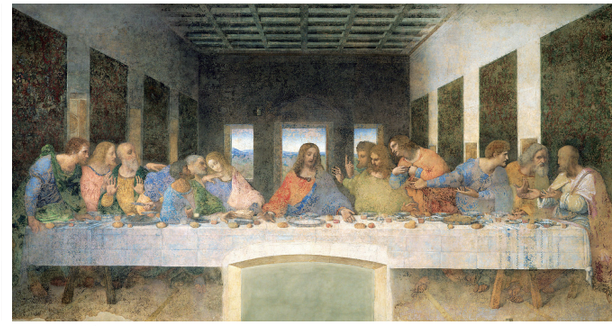
ルネサンス期には、一連の重要な発明もなされた。中国伝来の**火器**が→p.143改良され、鉄砲や大砲が発明された。また、これは従来の戦術を一変させ、騎士の没落をもたらした(**軍事革命**)。中国から伝わった**羅針盤**も→p.143、天体観測に頼っていた航海術を大きくかえて、ヨーロッパ人の海洋進出を可能とした。さらに、**グーテンベルク**(Gutenberg 1400頃～68)による**活版印刷術**の改良と紙の普及によって可能となった大量の印刷物が、文芸の振興をあと押しし、その後の宗教改革の一助ともなった→p.180。

人文主義のもとで、文芸でも豊かな成果が生み出された。**ダンテ**(Dante 1265～1321)による『神曲』が先駆となったように、ルネサンス期の文芸作品の多くは、ギリシア・ローマを模範としつつも、ラテン語ではなく各国語で著され、のちの国民文化の形成に貢献した。人文主義者を代表する**エラスムス**(Erasmus 1469頃～1536)は、人間はおろかしくとも幸福に生きていけるとし、謹厳さを誇る聖職者や学者を揶揄した。その友人の**モア**(More 1478～1535)は『ユートピア』を著して、キリスト教の天国とは別の理想郷の可能性を示した。この時代には、人間の感情や肉体的欲求も肯定されるようになった。**ラブレー**(Rabelais 1494頃～1553頃)はほら話と猥雑な記述で、笑いを人間の本性の1つとして復権させようとし❶、**シェークスピア**(Shakespeare 1564～1616)は人間の情念を歴史劇で描き出した。また、**セルバンテス**(Cervantes 1547～1616)は『ドン＝キホーテ』で、中世の騎士道を風刺した→p.136。

❶中世のヨーロッパでは、庶民のあいだを除いて、声を立てて笑うことは忌避されていた。

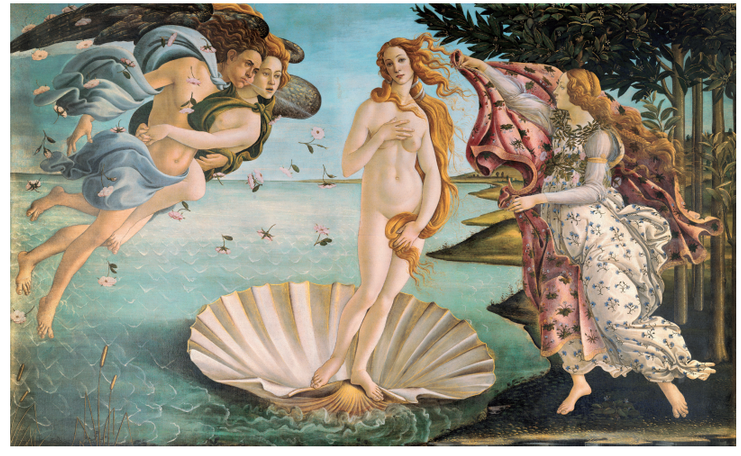
活版印刷所　親方(→p.122)のもとで、植字工が文字を拾い、奥の一人が活字にインクをつけ、もう一人が印刷機で印刷した。活版印刷術は東アジアで発明されたもの(→p.143)だが、アルファベットは漢字と比べて活字をつくりやすかったため、ヨーロッパでは各地へ急速に広まった。

「農民の踊り」　フランドルの民衆生活を描いたブリューゲル(1525頃～69)晩年の作品の1つ。彼は「農民画家」とも呼ばれ、キリスト教とは異なる主題を数多く描いた。



「最後の晩餐」　レオナルド＝ダ＝ヴィンチ作。遠近法をたくみに利用した作品として有名である。

「ダヴィデ像」　ミケランジェロ(1475～1564)の彫刻作品の代表作の1つ。1504年完成。フィレンツェの市庁舎前におかれた。高さ5.17m。



「ヴィーナスの誕生」　イタリアのフィレンツェで活躍したボッティチェリ(1444頃～1510)の代表作の1つ。メディチ家のために描かれたともいわれる。

ルネサンス期の美術

ルネサンス期の文芸と美術　伊＝イタリア　英＝イギリス　仏＝フランス　西＝スペイン　独＝ドイツ

【文芸】
- ダンテ(伊)…『神曲』
- ペトラルカ(伊)…『叙情詩集』
- ボッカチオ(伊)…『デカメロン』
- チョーサー(英)…『カンタベリ物語』
- エラスムス(ネーデルラント)…『愚神礼賛』
- モア(英)…『ユートピア』
- ラブレー(仏)…『ガルガンチュアとパンタグリュエルの物語』
- モンテーニュ(仏)…『エセー(随想録)』
- セルバンテス(西)…『ドン＝キホーテ』
- シェークスピア(英)…『ヴェニスの商人』『ハムレット』

【美術】
- ジョット(伊)…「聖フランチェスコの生涯」
- ファン＝アイク兄弟(ネーデルラント)…ガン(ヘント)の祭壇画
- ドナテルロ(伊)…「聖ジョルジオ像」
- ブルネレスキ(伊)…サンタ＝マリア大聖堂ドーム
- ブラマンテ(伊)…サン＝ピエトロ大聖堂
- ボッティチェリ(伊)…「ヴィーナスの誕生」「春」
- レオナルド＝ダ＝ヴィンチ(伊)…「最後の晩餐」「モナ＝リザ」
- デューラー(独)…自画像、「四人の使徒」
- ミケランジェロ(伊)…「ダヴィデ像」「最後の審判」
- ラファエロ(伊)…聖母子像、「アテネの学堂」
- ブリューゲル(ネーデルラント)…「農民の踊り」

第Ⅱ部

まとめ

部の学習内容を振り返る「まとめ」を設けました。「まとめの問い」とあわせて、世界史の枠組みやその展開を構造的に理解する一助としています。

交流圏の拡大

ユーラシアの諸地域では、古代国家の解体後、新しい制度や理念をもつ国家や社会が形成され、これらの地域を結ぶ交流がいちだんと活発になった。それを促進した動きとして、まずイスラーム勢力の拡大をあげることができるだろう。イスラーム勢力は、地中海地域に進出してキリスト教圏と対抗・交流の緊密な関係を結ぶとともに、中央アジアおよび南アジア、東南アジアにその教えを広げた。一方、13世紀にユーラシアの広大な領域を支配下に入れたモンゴル帝国の役割も大きい。帝国内の東西交通路が整備され、ヒト・モノ・文化の交流は急速に進んだ。さらに、この時期の交流のなかでヨーロッパに知られるようになったアジアの富への憧れも一因となり、15世紀末には、海を主要舞台として、「世界の一体化」と称されるような大規模な交流が始まった。これにより、ヨーロッパ人に征服されてその植民地となったアメリカ大陸も含めて、諸大陸の人々の生活と広域的な世界の動きとの関わりが深まっていくこととなった。

交流の活発化と様々な国家体制

交流の拡大は、世界各地の人々の暮らしを結びつける一方で、激しい競争や対立を生み出し、対外的な対抗意識を強めていった。ヨーロッパでは、封建社会の仕組みがしだいに崩れて中央集権化が進み、教皇権の衰退ともあいまって、明確な国境をもつ主権国家が並立する国際秩序が形成された。これらの国々は、国内の統合を強化しつつ、経済的・軍事的な優位をめざしてたがいに争った。一方、アジアの多くの地域では、ヨーロッパの主権国家よりはるかに規模の大きな諸帝国が、領域内の多数の民族を支配するとともに、周辺地域にも影響をおよぼしつつ繁栄した。19世紀以降、西欧諸国による世界支配が進むにつれて、主権国家体制が世界に広まっていくが、18世紀以前には、広域をゆるやかに統治するアジアの大帝国の富と力は、ヨーロッパ諸国をしのぐものとみなされていたのである。

まとめの問い

① 古代国家の解体後、広域的な交流は活発化したが、各時代でそれぞれどのような特徴があったのだろうか。地理的範囲、交流の内容、担い手などの観点から比較してみよう。

② 第Ⅱ部に登場する諸国家は、他国との交易や国内の文化的・宗教的な多様性について、どのような態度をとっていたのだろうか。いくつか取り上げて、その特徴を考えてみよう。

第19章 冷戦の終結と今日の世界

1970年代以降の産業構造の変容を経て、90年代初めまでに冷戦は終結した。今日の世界は多極化する一方、環境問題などでは国際的な協力を模索している。

Q 今日の地球世界には、どのような課題があるのだろうか。

現代史では、同時代のグローバルな動きがわかるような記述に配慮しました。また、1970年代末を画期として、構造的な変化についても留意しました。

1 産業構造の変容

Q オイル＝ショックの前後で、世界の社会と経済はどのようにかわったのだろうか。

福祉国家と公害

Q 先進諸国の社会では、経済成長にともなってどのような変化が生じたのだろうか。

1960年代以降、西側先進諸国では、国家が国民の福祉に手厚く配慮する**福祉国家**的な政策がしだいに主流となった。第二次世界大戦以前に福祉国家化が始まっていた北欧諸国に加えて、西欧諸国でも、**社会民主主義**❶を掲げる政党がしばしば政権を担い、無償あるいは低額での教育・医療・福祉サービスを実現したほか、大規模な公共事業によって雇用の安定をはかった。社会保障費の増大は、経済成長によって支えられた。また、アメリカ合衆国の歴代政権や日本の自由民主党政権も、同様の政策を推進した。西側諸国における福祉の拡充は、東側諸国との競合によってもうながされた。→p.326

他方で、経済成長は福祉国家的政策を支えるばかりでなく、**公害**とい

❶資本主義の存続を前提としたうえで、社会保障の拡充を通じて、労働者や低所得層を含む幅広い層の福利厚生を保障して民主主義の充実をめざす政治理念。

公害　第二次世界大戦後の経済復興・発展は、重化学工業の拡大をもたらす一方、著しい大気汚染・水質汚濁を引きおこし、人体にも影響を与えた。写真はアメリカ合衆国オハイオ州のクリーヴランドでの大気汚染の様子(1973年)。

酸性雨の影響でとけた石像　左は1908年、右は69年のもの。硫黄酸化物や窒素酸化物などの大気汚染物質を含む酸性雨は、土壌・水質や建造物にも影響を与えている。

❶1962年には、アメリカ合衆国のレイチェル＝カーソン(1907～64)が『沈黙の春』を刊行し、農薬が生物に与える否定的影響について警鐘をならした。

❷科学者や実業家らによる民間の研究組織であるローマ＝クラブが、『成長の限界』という報告書でこの見解を発表した。

グラフも適宜掲載しています。

❸為替レートを、市場での需要と供給に応じて自由に決める制度。

❹1960年に産油国の国際組織である石油輸出国機構が発足したが、68年にはアラブの産油国が別個にアラブ石油輸出国機構を結成し、原油の輸出価格などの決定権をもつようになった。

❺石油戦略をきっかけに、資源保有国が、他国やその資本の影響力を排除して、自国資源に対する支配権の拡大や管理・開発をめざす動きが高まった。こうした動きは資源ナショナリズムとも呼ばれる。

❻日本は第４次中東戦争で中立的な立場をとっていたため、原油の禁輸措置は受けなかったものの、原油高騰による物価高の打撃を受けた。

う社会問題も生んだ❶。有毒性の汚水やガスが工場から大量に排出され、河川・大気・土壌を汚染し、公害病による多数の犠牲者を出した。また、森林伐採や海洋の埋め立てなどの自然破壊も進んだ。これに対して、住民の抗議運動が広がるとともに、1972年には環境を主題とする初の国際会議である**国連人間環境会議**がストックホルムで開催された。同年には、資源は有限であり、このまま経済成長を続ければいずれは限界に達するとの警鐘も、科学者らによって発せられた❷。

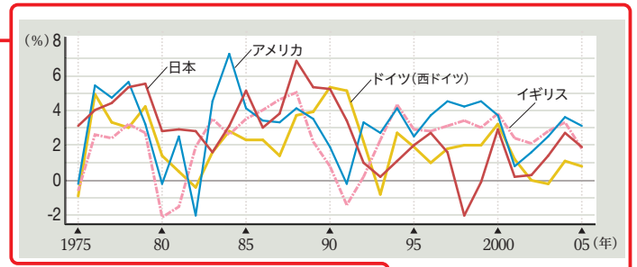
ドル＝ショックとオイル＝ショック

Q 1970年代初頭に、世界経済はどのような転換を迎えたのだろうか。

1960年代以降のアメリカ合衆国では、ベトナム戦争(→p.332)による巨額の戦費とともに、社会保障費の増加が重い負担となった。また1971年には、西欧と日本の経済成長により、１世紀近く続いた合衆国の貿易収支の黒字も赤字に転じ、国内から金が流出した。これを受けて同年、ニクソン大統領(→p.333)はドルの金兌換停止を発表して、世界に衝撃を与えた(**ドル＝ショック**)。アメリカの経済力と金・ドル本位制を基盤とするブレトン＝ウッズ体制(→p.315)は終わりを迎え、73年、先進工業国の通貨は**変動相場制**❸に移行し、世界経済は合衆国・西欧・日本の三極構造に向かいはじめた。

ついで、1973年にエジプト・シリアとイスラエルとのあいだで**第４次中東戦争**(→p.342)が勃発すると、アラブ諸国を含む**石油輸出国機構**(OPEC)❹は、イスラエルを支援する西側諸国に圧力をかけるため、原油価格を引き上げた。アラブ石油輸出国機構(OAPEC)も、イスラエル支援国に対する原油輸出を禁止した。こうしたアラブ諸国による石油戦略❺の結果、西側諸国では急激な物価高が生じた(**第１次石油危機**〈**オイル＝ショック**〉)❻。ドル＝ショックとオイル＝ショックは世界的な不況を引きおこし、安価な原油を前提としてきた先進国の好景気は終わり、まもなく立ち直った日本を除いて、西欧諸国やアメリカ合衆国の経済成長は減速した。75年には、世界経済の主要問題を討議するために、**先進国首脳会議**(**サミット**)の開催が始まった❼。

原油価格の推移(「BP世界エネルギー統計　2019」より作成)



日本と主要先進国の経済成長率の推移(三和良一・原朗編『近現代日本経済史要覧　補訂版』より作成)

量から質へ

Q オイル＝ショック後、各国の社会と経済はどのような変化をとげたのだろうか。

オイル＝ショックは、生産の規模を重視してきた経済路線に見直しをせまり、西側先進諸国では大量生産よりも高度な技術が重要視されるようになって、**量から質への産業構造の転換**が始まった。コンピュータやエレクトロニクスといったハイテクノロジー産業が本格的に形成され、省エネルギー化も追求された。他方、世界有数の産油国であるソ連では、原油輸出による外貨獲得が積極的に進められ、国民の生活水準も短期的には向上した。しかし、外貨による機材の輸入に依存した結果、ソ連では産業のハイテク化や省エネ化はおこなわれず、旧式の設備が維持され、環境汚染も拡大した。

現代史の記述を整理し、流れを構造的に理解できるようにしました。

オイル＝ショックののち、西側先進諸国では、経済の効率性がより重視されるようになったが、これは福祉国家的政策の見直しにもつながった。社会保障費や公共事業費が国家予算に占める大きさが批判され、「小さな政府」を求める声が強まった。その結果、1970年代末から80年代にかけて、イギリスの**サッチャー**(Thatcher 1925～2013(在任1979～90))、アメリカ合衆国の**レーガン**(→p.344)、西ドイツのコール(Kohl 1930～2017(在任1982～98))、日本の中曽根康弘(1918～2019(在任1982～87))などの各政権が、市場経済を最優先し、競争原理を重んじる**新自由主義**的な政策を打ち出した。これらの国では電

❼フランス・アメリカ合衆国・イギリス・西ドイツ・イタリア・日本を参加国として始まり、翌年にカナダも加わった。サミットはG７(Group of Seven)とも呼ばれる。

新自由主義の担い手たち　左から、中曽根康弘、サッチャー、レーガン。写真は1987年の第13回先進国首脳会議の時のもの。

ポップ＝アート　ウォーホル(1928～87)作の「キャンベルスープ」(1962年)。1960年代のアメリカ合衆国では、商品や広告などを題材に、大量生産・大量消費社会を表現するポップ＝アートが流行した。ウォーホルはその代表的な芸術家である。

た。さらに、欧米諸国は「文明的」であり、アジアやアフリカは「野蛮」「未開」であるという価値観が、理性や進歩といった観念の背後に隠されていたことを批判する**ポスト＝コロニアリズム**(post-colonialism)や、各地域の文化は独自の意義をもっており、対等であるとする**文化多元主義**が打ち出された。これらの批判や問題提起をふまえたうえで、合理主義が重んじてきた理性や進歩、自由や人権といった概念を、いかに継承していくかが今日の重要な問いとなっている。

また、合理主義の再検討にともなって、「高尚な」芸術と「通俗的な」芸術を厳格に区分するのではなく、**ポップ＝カルチャー**をはじめとする多様な芸術表現を等しく尊重する動きが進んだ。

女性の平等化とジェンダー

Q 両性の同権化はどのように進み、また、どのような課題を残しているのだろうか。

パンクハースト　マンチェスターのキャラコ捺染業者の家に生まれ、1903年に女性社会政治同盟を結成した。「言葉ではなく行動を」というスローガンのもと、女性参政権に反対する議員候補の演説妨害や下院への突入の呼びかけなどの過激な戦術に訴え、たびたび投獄された。

合理主義は人権の理念を追求したが、20世紀初めに至るまで、人権を完全に行使できる市民としては、男性のみが想定されていた。女性は自立的な市民ではなく、男性の妻、ないし娘にすぎないとされ、選挙権をはじめとする一連の権利を奪われていた。この状態をかえるべく、イギリスではパンクハースト(Pankhurst 1858～1928)ら女性参政権活動家(サフラジェット(Suffragettes))が、抗議活動を展開してきびしい取り締まりを受け、第２インターナショナル(→p.264)も女性参政権を重要な要求に掲げた。第一次世界大戦中の総動員体制は、女性の社会進出をうながし、また戦争遂行を担った代償として、戦中から戦後にかけて、一連の国々で女性参政権が導入された。(→p.281)

第二次世界大戦後、女性と男性の政治上の同権化は各地で進んだが、賃金格差をはじめ、社会生活における女性差別は先進国でも依然として残った。これに対して1960～70年代以降、欧米諸国や日本などにおいて女性解放運動が高揚し、男尊女卑的な価値観からの転換を訴え、女性が完全な市民として認められてこなかったことを批判した。女性差別を生み出す社会構造の変革をめざす**フェミニズム**理論も活発に論じられた。1979年には国連総会で女性差別撤廃条約が採択され、85(昭和60)年には日本でも男女雇用機会均等法が制定されたが、日本では国会議員・企業管理職・大学教員などに占める女性の比率が依然として低く、家事・育

女性の平等化への取り組みや近年に理解が進んだジェンダーの概念なども紹介しています。

現代世界への視点④　ジェンダーの考え方と両性の平等化への課題

Q ジェンダーとはどのような考え方だろうか。また、両性の平等をめぐって日本や世界にはどのような課題があるのだろうか。

女性は女性らしくなければいけない、あるいは、女性のつとめは家を守ることだといった価値観は、長いあいだ世界中で女性の活躍の機会を制限してきた。20世紀後半に登場したジェンダーという考え方は、このような価値観を切り崩すのに大きな役割を果たした。身体的な性とは別に、社会的な規範としての性があるというのがジェンダーの考え方である。この観点に立って、女性はどうあるべきかといった規範や、両性の役割分担の実態は、歴史的に決して不変ではなく、時代や社会状況によってかわってきたし、今後もかわりうるということが明らかにされてきた。それでも男性中心の社会構造はなかなかかわらないし、日本ではとくに遅れがめだつ。両性の役割を固定的に考える発想を、批判的に見つめ直すことが必要であろう。そうすることは、女性ばかりか男性の可能性を広げることにもつながる。実際、「男らしさ」という規範は、男性同士の仲間関係をうちかためる一方で、仲間に軽蔑されないようにあえて暴力的にふるまうといった行動を、往々にして男性に強いてきたのである。

第19章には、コラム「現代世界への視点」を設けて、世界史探究のゴールとなる「地球世界の課題の探究」につなげられるようにしました。

レードが国内各地で開かれた。これはＬＧＢＴの権利を求める運動の端緒となり、その後もパレードは世界各地で継続されている。写真は2016年のもの。

2	アルバニア	0.842
3	フィンランド	0.832
4	スウェーデン	0.820
5	ニカラグア	0.804
6	ニュージーランド	0.799
7	アイルランド	0.798
8	スペイン	0.795
9	ルワンダ	0.791
10	ドイツ	0.787
15	フランス	0.781
19	カナダ	0.772
21	イギリス	0.767
53	アメリカ合衆国	0.724
76	イタリア	0.707
81	ロシア	0.706
106	中国	0.676
108	韓国	0.672
121	日本	0.652

ジェンダー＝ギャップ指数(GGI、世界経済フォーラムGlobal Gender Gap Report 2020より作成)　この指数は、国際機関などのデータをもとに世界経済フォーラムが発表している、各国の男女間の格差を示す指標である。経済・教育・保健・政治の４分野・14項目からなり、スコアで１が男女間での完全平等を示す。2020年度の発表では、日本は総合で153カ国中121位と、先進国中で最下位となった。日本は保健分野の項目では１位が多いが、教育分野では中等教育で格差が現れ、さらに経済・政治分野では深刻な格差が存在している。

分野	スコア(順位)	19年のスコア(順位)
経済	0.598(115位)	0.595(117位)
政治	0.049(144位)	0.081(125位)
教育	0.983（91位）	0.994（65位）
保健	0.979（40位）	0.979（41位）

児における女性の過重負担も解消されていない。また、アジアやアフリカなどでは、貧困と差別、因習によって女性がとくに困難な立場におかれている国もある。

一方で、20世紀後半には、先進国をはじめとする諸地域で、都市化の進行にともなって性別をめぐる伝統的な価値観がゆらいだ。21世紀初めまでに、身体的な性とは別に、社会的につくられる規範としての**ジェンダー**(gender)があるという理解が広く受け入れられるようになり、伝統的な性役割を押し付けるのではなく、各人の個性を尊重すべきことへの理解も進みつつある。加えて性的指向についても、本人の意思を尊重して、多様な性のあり方を受け入れるような社会が模索されている。

『詳説世界史』の特色

1　バランスよく、わかりやすい丁寧な記述

- 分野・時代・地域をバランスよく、**背景や因果関係も丁寧に記述**しました。
- 新執筆陣のもと、近年の歴史学の研究成果を豊富に盛り込み、各時代で日本史も含めた同時代のつながりにも配慮しました。

2　時代の特色をつかむ多様な問いかけ

- 随所に「問い」を設けて学習目的を明確化し、さらに第Ⅰ部～第Ⅲ部の冒頭に**「第○部を学ぶ前に」**を、終わりには**「まとめ」**を設け、構造的に世界史を理解できるようにしました。
- 第Ⅳ部の第19章には、現代の課題を歴史的にみるコラム**「現代世界への視点」**を設けました。

3　探究活動に取り組みやすい大きな図版・豊富な史資料

- 従来よりも**判型を大きく**し（A5判→B5変型判）、図版や図表・文字史料を大幅に増やしました。
- 二次元コードから、図版・史資料をより詳しく見ることができるようにしました。

『詳説世界史』の著作者

［編者］

木村　靖二　東京大学名誉教授
岸本　美緒　お茶の水女子大学名誉教授
小松　久男　東京大学名誉教授
橋場　弦　東京大学教授

［著作者］

阿部　幸信　中央大学教授
池田　嘉郎　東京大学准教授
勝田　俊輔　東京大学教授
島田　竜登　東京大学准教授
林　佳世子　東京外国語大学学長
村上　衛　京都大学准教授
株式会社 山川出版社

［編集協力者］

石井　栄二　東京都立国立高等学校教諭
藤本　和哉　筑波大学附属高等学校教諭

B5変型判（230mm×174mm）　**398頁**

☒図版（写真）	495点	☒地図	119点	☒グラフ・図表	52点（グラフ9＋図24＋表19）
☒文字史料	50点	☒二次元コード	29点		

山川出版社　〒101-0047　東京都千代田区内神田1-13-13
TEL 03-3293-8131　FAX 03-3292-6469　https://www.yamakawa.co.jp/